アリエル

イスラエル文学芸術関係評論レポート

50

יובל לכינון היחסים הדיפלומטיים ישראל-יפן

日本イスラエル国交樹立 50 周年

レム 2002 年

הוי אריאל אריאל קריה חנה דויד

「ああ、アリエルよ、アリエルよ。ダビデが営をかまえた町よ」(口語訳イザヤ書29：1)

ARIEL

アリエル

江苏工业学院图书馆
藏书章

エルサレム2002

アリエル：イスラエル文学芸術関係評論レポート

1962年創刊

総編集：アシェル・ワイル
日本語版編集・監訳：辻田真理子
編集顧問：ズィヴ・ネヴォ・クルマン(駐日イスラエル大使館文化担当官)
デザイン：マーティン・ガビソン

日本語製版：日刊企画
印刷：アハバ印刷株式会社

ISSN 0004-1343

発行：英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語、アラビア語で定期発行
ホームページ：http://www.mfa.gov.il
外務省：文化・科学担当部
Eメール：magariel@netvision.net.il

頒布価格：1200円

CULTURAL AND SCIENTIFIC RELATIONS DIVISION / MINISTRY FOR FOREIGN AFFAIRS
214 Jaffa Street, Jerusalem 94383. Tel. 02-6449707, Fax. 02-6437502
e-mail: magariel@netvision.net.il

シモン・ペレス

日本の読者の皆様へ

日本とイスラエルという二つの国を表面的に眺めると、文化的にも地理的にも大きく異なっている印象を受けます。イスラエルはアジア大陸の西端にあり、日本はその全く反対側、イスラエルから見れば、遠い遠い極東にあることになります。この二つの国民の歴史は一度も正面から交差したことはありませんし、共通の宗教的背景もありません。

しかし、これらの相違にも関わらず、両国はその歴史的文化的発展において、多くの共通性を持っているといえるのではないでしょうか。どちらの国も半世紀前には非常に大きな悲劇に見舞われ、それに苦しみ、まだその記憶に生きている人々を多く抱えています。ユダヤ人はヨーロッパにおけるホロコーストにおいて言語に絶する被害と心の傷を受けましたし、日本人は広島と長崎の恐ろしい経験を通りました。これらの経験は私たち両民族それぞれの心に強く残っており、確かに現在は私たちの存在を脅かす脅威は過ぎ去ったというものの、これらのトラウマが両国民の精神に大きな傷を残していることは明らかです。

さらに、日本とイスラエルは、ともに天然資源には欠けていますが、人的資源では恵まれています。両国はそれぞれの国民の力によって、これらの苦難と惨状を乗り越え、再び、生き生きとした、豊かで、オープンな民主主義社会を築き上げることに成功したのです。

私は、日本とイスラエルの国交が樹立して50年を迎えるこの年に、日本の読者を対象にしたこのアリエルの特別号に序文を書くことができ、大変うれしく思っています。

両国の文化関係は急速に成長してきました。特に最近の十年間は、お互いに対する健全な好奇心と関心が育ってきているように見受けられます。イスラエルのアーティストたちがいかに好奇心をその多様な活動に反映させているかは、この本の多彩な記事を通しても伺い知ることができます。また、イスラエルにおいて日本に対する関心が高まっていることは、年々増えていく日本に関連する様々な催し物によっても明らかです。日本に関する会議やシンポジウムが数多く開かれています。今年の2月にはイスラエル東アジア学会議が、6月には日本イスラエル国交樹立50周年記念シンポジウムが開催されましたし、ハイファ大学においては二日間にわたって「白と青(イスラエル)の中の日本」というテーマでイスラエルにおける日本の影響を論じる会議が開かれ、関心ある人々が多数集まりました。エルサレムのヘブライ大学とテルアビブ大学には東アジア学科があり、ハイファ大学においても学科開設が予定されています。また、これらの大学では500名以上の学生が日本語、日本の文化や文学を専攻しています。

この数年間、イスラエルのアーティストが日本の人々の前に立つ機会も増えてきました。イスラエル映画は東京における恒例の映画祭において毎年紹介されています。イスラエル・オーケストラは少なくとも3年に1回は日本でコンサートを開いており、国際的にも有名なイスラエル人ズービン・メターをはじめ、ガリ・ベルチニ、ダニエル・オレン、ロリン・マアゼルなどが指揮をしました。多くのクラシックやポピュラー音楽のグループが日本において好意的に受け入れられましたし、イスラエルバレー団のバットシェバやキブツ現代ダンス団、ヴェルチゴなど、子供たちの合唱団や民族ダンスのグループまで、様々なグループが日本で公演を行っています。彫刻家のダニ・カラヴァンは札幌から鹿児島まで、日本の各地で作品の展示を行い、直接その作品に触れた日本人も多いことでしょう。1998年に、カラヴァンは高松宮賞を受けています。

また、日本ではイスラエル文学に対する興味も大きく、日本の出版社により、アモス・オズ、アハロン・アペルフェルド、ダヴィッド・グロスマン、デーヴィッド・サチャー、ガリラ・ロン＝フェデル、ウリ・オルレブ、エフライム・キション、イェフダ・アミハイ、シュラミット・ラピッドなどの作品が紹介されています。イスラエル児童文学についても大きな関心が寄せられ、日本の都市数ヶ所で移動展示が行われました。また、エルサレムで隔年に行われる国際書籍見本市には、日本からも多くの出版社が参加しています。

このようにして、イスラエルと日本の関係が進展するにつれて、両国の国民はそれぞれの社会についての知識をお互いに深めることになりました。特に最近では、文化面での交流に留まらず、科学、技術また、通商、貿易など様々な分野にまで拡大してきています。両国の貿易額は年間20億ドル規模にも上り、ハイテク産業がその中心を占めています。ハイテク産業において、イスラエルとの技術的協力に大きな可能性があるという認識が日本でも定着してきているようです。こうした発展が科学の諸分野でも進んでいくことを願っています。この数年間、イスラエルと日本の大学の間や、研究機関の間に、様々な協力関係の合意が結ばれてきています。また、政治面においても、日本は中東地域での平和促進に努力を惜しまず、特に和平過程へ積極的に参与してきています。

文化への関心の深まりは、日本とイスラエルとの間に存在する特別な関係が非常に健全であるという証でもあります。私はこうした関心が今後もますます深まり、強化されると確信していますし、また、個人的には日本作家の作品をもっと多くヘブル語で読みたいと願っています。そして、日本の芸術家たちがイスラエルで活躍すること、さらに多くのイスラエル芸術家が日本を訪問し、彼らの活動を紹介できるようになることを心から期待し、その実現を信じています。

2002年６月　エルサレムにて

イスラエル国外務大臣　シモン・ペレス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アリエル日本語版特別号
目　　次

ダニエル・ガヴロン（訳：宮島康子）
手袋をはずしたエルサレム
－宿怨の抗争下で相互理解と共存の精神を鼓舞する『境界線博物館』
8

村田靖子
イェフダ・アミハイ
－分裂都市エルサレムの詩人
20

ジャック・フェルマン（訳：三宅良美）
エリエゼル・ベン＝イェフダ
－言語の再生
29

アミール・グットフロインド（訳：辻田真理子）
短編：僕たちのホロコースト
35

ダニ・カラヴァン
隠された庭
40

ルツ・アルモグ（訳：母袋夏生）
短編：エナナ
45

オラ・ビヌール（訳：辻田真理子）
イスラエルの室内音楽
51

シェリー・クレイマン（訳：橋本ひろこ、中居由江） 54
天国に近い庭
ーハイファ、カルメル山にあるバハイ寺院の庭園とテラス

母袋夏生 64
ショアー詩人ダン・パギス

レヴ・シルキン（訳：宮島康子） 72
虹をつかむ

A．B．イェホシュア（訳：三宅良美） 77
建国後世代の文学
ーそのアイデンティティー

オルリ・カステル＝ブルーム（訳：母袋夏生） 84
短編：不思議な子ども（神童）

ラミ・サアリ、イスラエル・ピンカス、ナタン・ヨナタン、デンヴィット・アヴァタン、ナタンザッハ、ラミ・ディツァニー、ナイム・アライデ（訳：辻田真理子） 93
現代詩七篇

エトガル・ケレット（訳：ツァイリ享子） 105
短編：ブタを壊せ

ロニー・ライヒ（訳：橋本ひろこ、中居由江） 107
イスラエルにおける考古学研究

エフド・シャフテル（訳：ツァイリ享子） 110
短編：ヤミン・モーシェの花

ヤエル・イスラエル、イガル・ザルモナ（訳：辻田真理子） 114
取り扱い注意
ーイスラエル博物館のガラス工芸展

シュムエル・モレー（訳：三宅良美） 122
イスラエルのアラブ文学研究

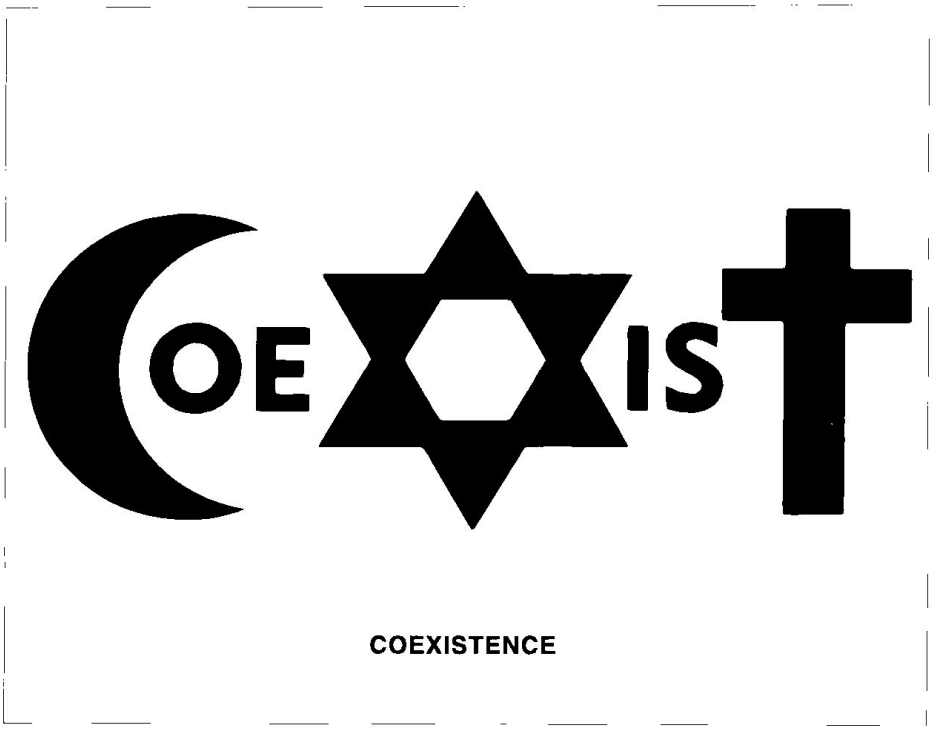
とちぎあきら 128
まだ見ぬ映画のために
ー日本におけるイスラエル映画

エトガル・ケレット（訳：母袋夏生） 139
短編：死者の休暇

アムノン・ジャコント（訳：ツァイリ享子） 141
短編：隠れた善き行い

執筆者紹介 145
謝辞

英語目次 148



ピオトル・ムロドゼニエク（Piotr Mlodozeniec）、ポーランド、2000年

1967年以前、分断されたエルサレムの唯一の通行地点マンデルバウム門に立つイスラエル軍とヨルダン軍の兵士たち

ダニエル・ガヴロン

手袋をはずしたエルサレム

宿怨の抗争下で相互理解と共存の精神を鼓舞する『境界線博物館』

「ここを訪れて無関心なまま帰れる人はいません」と、『対話・相互理解・共存のための境界線博物館』館長ラフィ・エトガルは言う。彼は、この博物館を訪ねる誰でもが明らかに感じる単純な事実、真実を述べたに過ぎない。団体の一人としてここを訪れる時、特にそう感じる人が多いようだ。境界線博物館は、苛酷なまでに複雑なありとある局面からエルサレムを提示してみせる。それは扇情的で、苦痛に満ち、受け入れ難く、そしてどんな手加減もしない。雄弁に対話・相互理解・共存を説くと同時に、そのような崇高な願いを実現するためにはどんな問題が克服されなければならないかをつまびらかに照らし出す。

博物館の建物は、地方地主ハサン・ベイ・トゥルジェマンの所有地に1932年に建てられた『トゥルジェマン・ハウス』である。1948年のイスラエル独立戦争の結果、エルサレムが分割されて、建物はイスラエル側境界線上に位置することになった。それはイスラエルとヨルダン王国を繋ぐ唯一の公認通路となったマンデルバウム・ゲートに隣接していて、イスラエル防衛軍の駐屯地となった。反対側、道をわたってすぐの所には、ヨルダンのアラブ軍団兵に占領されたスタイナー・ハウスがあった。そのそばにはイスラエル・ヨルダン合同休戦委員会の所在地が置かれていた。1967年の六日戦争に続いて、町が統合されると共に、これら軍事上の前哨地点は不要となり、撤収された。そして1980年、エルサレム市とエルサレム基金がこの建物を復旧し、博物館としたのであった。

1993年のオスロ合意後、イスラエル－パレスチナ間の交渉が始まったことを受けて、博物館のスタイルもメッセージも根本的に再考されなければならないと、博物館のスポンサーは感じた。そこで、ラフィ・エトガルが、寛容と多様性というメッセージを伝え、さらに集団力学を活用できるように考えられたマルチメディア・ディスプレイを提案したのである。

ドイツ出版界の元老とも言える有名な故ゲオルグ・フォン・ホルツブリンクとその遺族など数人の資金援助者の支持を得て、この企画は推進され、1999年に現在の形での境界線博物館が開かれた。

その新しいコンセプトは、既に入り口を通る瞬間からはっきりと分かる。「境界線博物館にようこそ・・・」と、携帯解説器の録音された声が言う。展示場を回る個人見学者を案内するためにデザインされたものだ。「・・・ユダヤ人とアラブ人との間の境界線、無信仰派と正統派との間の境界線、イスラエルという、中でもエルサレムという多文化社会を構成する様々なコミュニティーの間にある境界線へ。私たちはあなたに紛争の実情を指し示し、そして問いかけます。答えは私たち一人々々の中にあります。私たちはそれと立ち向かう用意があるでしょうか？」

最初の映像が、それぞれに異なる服装の男女を見せる。ユダヤ人、アラブ人、超正統派ユダヤ人、キリスト教神父、イスラム教カディ、ユダヤ教ラビ、伝統的な東方系ユダヤ人、現代の若者。服装はもの

すごいスピードで移り変わって、別の人物とも頻繁に交錯し合う。明らかに、外見は違っても人々の中身は本質的に同じである、というメッセージだ。

その傍に、イスラエル独立宣言の一節が鮮明に映し出される。

「イスラエル国家は、自由・公正・平和の原則のもとに建国される。これは、イスラエル民族の預言者が抱いた夢を反映したものである。イスラエル国家は、宗教・民族・性別に関わりなく社会的および政治的に完全に平等な権利を、その市民に与える」

これによって動かし難く突き付けられる問いはこうだ。我々イスラエル人は、50年を経た今もまだこれらの原則を実現する義務を感じているだろうか？我々は、個々人として、それらをせめて意識しているだろうか？我々はこれらの原則の成就を積極的に押し進めているだろうか？

1948年から紀元前2000年前後まで一挙に遡って、アブラハムとロトの論争が２６ヶ国語で提示される。「アブラハムはロトに言った、『わたしたちは身内の者です。わたしとあなたの間にも、わたしの牧者とあなたの牧者の間にも争いがないようにしましょう』」（創世紀13章8節）。そしてアブラハムは提案する。『どうかわたしと別れてください。あなたが左に行けばわたしは右に行きます。あなたが右に行けばわたしは左に行きます』

大切なのは、アブラハムとロトが「話しをする」、というところだ。太陽の下に新しいことは何もなく、歴史上いつも同じことが繰り返されている。領土紛争は何千年も前から私たちについてまわってきている。だが問題の解決は対話と論議と妥協を通してなされなければならない。たとえ当面の解決は別れることにあったとしても。

現代へと戻る。現代エルサレムの多様性が三面のスクリーンに映し出される。シナゴーグ、モスク、教会、聖書の巻き物、ろうそく、鐘、唯一神への三つの異なった形での祈りの映像が現れる。国際連合での分割案投票に、ダンス、紛争、爆発の映像が目まぐるしく続く。古代と現代、聖と俗、ユダヤ教とイスラム教とキリスト教のモチーフが隣り合いながらそれぞれのスクリーンに映る。アラブの市場、ユダヤの市場、石造りの建物、それぞれの宗教の墓地。聖体拝受と現代のディスコテックが並んで映る。エルサレムの統合と様々なグループによるデモ行動、アラブ人捕虜が手を頭の上で組んだまま連行されていく、アンワル・アル・サダト大統領のイスラエル訪問が画面を一瞬かすめる、羽根ペンが削られて聖書の巻き物を書く。建物が壊されてはまた建てられる。

次の展示室は、1948年から1967年までの分断されたエルサレムを扱っている。「前方に国境あり！」、「危険！地雷！」といった標識がかかっている。等身大のイスラエル人警官とヨルダン軍兵隊がほんの数メートル隔てられて立っている拡大写真がある。彼らは鉄条網で隔てられているだけではなくて、それぞれが自分の国の方を向いて、明らかに、相手の存在に気がついていないのだ。博物館の見学者は、1950年代に撮られたフィルムをコンクリート壁の銃眼から覗くよう促される。これは町の向う半分、ヨルダン側をこっそり覗き込んでいるような感覚を生み出す。閉所恐怖症のような感覚に陥るのは確実で、そこに「強制的な分離」というメッセージが鮮烈に伝わってくる。

これに続いて、直角に並んだ三面のスクリーンには、とても冷静に眺めることのできない暴力的な映像が映し出され、今日の現実を境界線博物館はどう見ているかを提示する。今度のシーンはほとんど留まるところを知らぬ暴力と衝突だ。デモ行動、投石、火炎ビン、馬上で警棒を振り回す警官、殴打、逮捕、爆発、救急車、死者や負傷者。故意に音量を上げた耳を聾するばかりのサウンドトラックと共に流れるイメージは苛酷で不快だ。ヘブライ語、アラビア語、英語での掲示が宣言している。「それはわたしではない！」ここに暗黙の問いが問われている。「本当に？それがあなたでないというのは確かですか？」

その後、プレッシャーからの解放が来る。別の紛争地域である四つの町のショート・フィルムが映さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れる。多数派が過激派を抑え平和に票を投じたベルファースト、壮絶な民族抗争の解決が迫られているサラエヴォ、度量の大きなネルソン・マンデラが憎悪から「南アフリカの真実と和解会議」設立へと道を開いたヨハネスブルグ、そして一発の弾丸も撃つことなく壁の崩壊をもたらしたベルリン。再度、暗黙の問いかけ。これらの町は、和解への希望を象徴しているのだろうか？そうかもしれない。あるいは、他の所でも衝突があるということを思い起こさせて、少し気を楽にさせるためだけなのだろうか。

次に、はじめて何の問いかけもない場があらわれる。白と黒だけの壁が、異なった人種･エスニック集団間の寛容を明確に訴えている。白なしに黒は存在しない、とメッセージは言っている。黒と白とは対立物ではない、それは互いに補完し合っているのだ。全ての人間は色合いを織り出す虹なのだ。どんな色のどんな人にも、自由に生きる権利がある。

特別展示室には今、写真家ディディエ・ベン・ルルの作品にイェフダ・アミハイの詩を添えた「微かなる恩寵」展がかかっている。ベン・ルルはパリに生まれ、1993年にイスラエルへ来た。彼の写真は世界各国で展示され、多くの賞を得ている。この展覧会が始まる少し前に他界したアミハイは、イスラエルで最も愛され、またその詩が最も広く翻訳されている詩人である。

エレベーターで上階へ昇って「しゃべる頭」展示室へ。その途中には、見学者が感想を書き込むための訪問記念帳が置いてある。見学者に壁に「落書き」してもらうための電子グラフィティー装置もある。これらの感想は博物館の記録バンクに保管されることになっている。また、スクリーン上の人間の巨大な画像が絶えず変化しながら男性になり女性になり、ユダヤ人に、アラブ人に、見学者に変っていく。そしてこれらの人物がヘブライ語、アラビア語、英語その他の言語で「話しましょう」と繰り返す。

「しゃべる頭」は、エルサレムの住人、見学者、指導者、そして、町を通るごく普通の人々を代表している。普通の人々はイスラエル人、パレスチナ人、ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒などを含んでいる。彼らは小さなスクリーンに現れて、短いメッセージを語る。ハシディームの服装の超正統派ユダヤ人が、人はみんな神の似姿につくられているのだから、みんな一緒に生きることは当然できるはずだと述べる。ケフィエ（頭に被る布）をつけたアラブ人が、エルサレムは三つの宗教全てに属するべきもので、神を信じる者なら誰でもここで祈るのは自由であるべきだと主張する。その対極では、ユダヤ人入植者が「ユダヤ人が神殿の丘を支配すべきだ、それ以外のことは考えられない」と宣言し、他方、アラブの老人がエルサレムはずっとアラブのものだったし、これから何百万年もそれは変らないと言明する。エルサレム前市長のテディー・コレックが平和と安定は妥協によってのみ可能だと説き、パレスチナ人知識人のサリ・ヌセイベが人々・感情・感性・記憶からなる複雑なモザイクと政治構造とを区別すべきだと述べる。17世紀以来代々エルサレムに住んでいるというユダヤ人のエルサレム住民が、ユダヤ人とアラブ人はいつも一緒に生きることができていたと主張する。ヤセル・アラファトが、エルサレムを「バチカンのように」二つの国家の首都とすることを要求する。

別のコーナーでは偏見と固定観念が指し示される。「アラブ人が理解するのは力だけだ」、「超正統派ユダヤ教徒は税金も払わないし軍役にもつかない」、「世界中が我々に反対している」などの文章が示され、見学者は会議室に入る前にこれらの意見についての態度決定を促される。会議室では長いテーブルを囲んで見学グループがまとめの討議をする。

見学者の反応はどうか？「私たちは問いかけているのです」と、館長のラフィ・エトガルは言う。「私たちは答えを与えません。イスラエル前大統領のエゼル・ヴァイツマンはここを訪れた後、この博物館は平和を作り出していないと、私たちに言いました。彼はもちろん正しいのです。私たちは世界の問題を解決することはできません。でも私たちの博物館は問題を理解するという点で小さな貢献ができるかも

非武装分離地帯での生活、エルサレム、1961年

1967年までイスラエル国境通過地点にあったトゥルジェマン·ハウス、現在の境界線博物館

しれません」

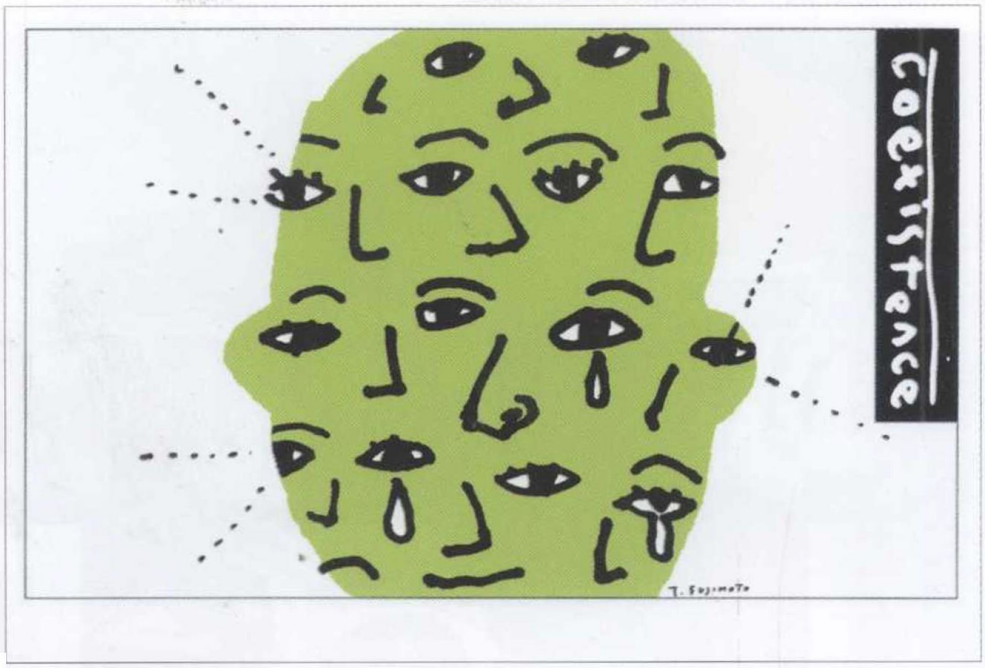
落下傘部隊兵たちが見学に来た。もっとも印象深かったのは、彼らがここを見学したというまさにその事実と、また、境界線博物館が提示する「既成概念をくつがえす」とも見なされる考え方に、彼らが曝されたということだ。彼らは独立宣言について短い討論を行なった。一部は先述の一節を堅固に擁護し、一部はユダヤ人国家であり同時に民主主義的であることは不可能だとして、ユダヤ人市民により大きい権利を与えるべきだと主張した。

一般的な反応は、現在博物館が行っている「現実」の呈示が非常に一方的だということだった。いや、真実でない訳ではない、と付け加える。ここで見せられたものは全て真実だ、しかし真実の全体ではない。イスラエル社会のもっと肯定的な面も含んだ展示をするべきだ、との感想である。

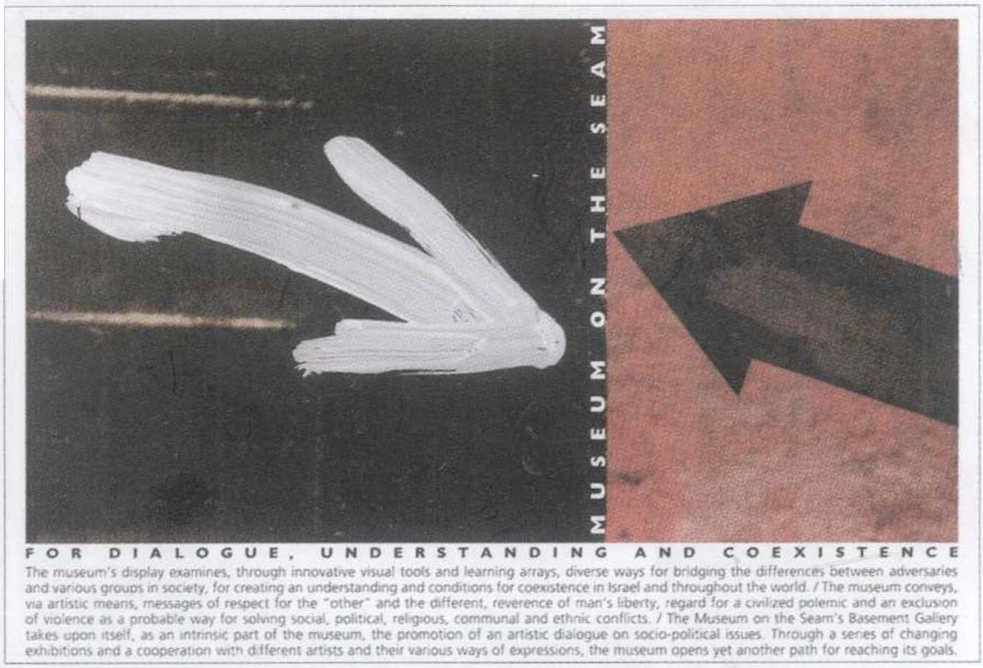
博物館のガイドは、最終討論を比較的に些細な問題へとリードする。ビデオの一つに登場した、大胆に肌の見える服を着た女の子の言葉だ。メア・シェアリームの超正統派ユダヤ教徒地区を、自分の好きな服装をして自由に歩き回りたいと彼女は言ったのだ。活発な議論が続いた。何人かの兵隊は女の子の意見を擁護したが、大多数は彼女の要求する完全な自由よりも宗教的住民の感情を尊重すべきだと主張した。

アメリカから来たティーンエイジャーのグループの反応も、兵隊たちが示した反応とそう違ってはいなかった。彼らの意見も、独立宣言について同様に分かれた。ガイドは、彼らにエルサレムの近代史を分割映像画面で見せたすぐ後に、アブラハムとロト

エルサレム旧市街の壁に沿って展示された「共存」をテーマにしたポスター類、2000年



タカアキ・フジモト
(Fujimoto Takaaki)、日本
第一位受賞作品



ラフィー・エトガル
(Raphie Etgar)、イスラエル

色の歴史手帖

【日本の伝統色十二カ月】

企画　槇野　修
プリンティング・ディレクター　半澤敏雄
協力　ITメディア・フュージョン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com